

アクションリサーチによる学級内関係性の形成過程(6)

—教室コミュニケーションにみるジェンダー—

○秋田喜代美・鈴木宏明・市川洋子

(東京大学・成蹊小学校・お茶の水女子大学大学院)

【問題・目的】筆者らは一つの学級を週1回1年間30日間同一活動時間に観察を続けながら、教師と研究者が場を共有し協働する中で実践の中に問いを見出し、それに対処しつつ探究していくことを目的とするアクションリサーチを実施してきた。前回の発表(2000、発心)においては、教室会話に参加する子どもの役割に着目しその1学期における変化を分析した。この分析観点は、ある子が仲間との関係の中で担わされている役割に対する教師の問題意識に基づくものであった。今回の分析では、コミュニケーションにおいて、ジェンダーにより教室参加のふるまいがどのように異なるかを検討する。この観点もまた、担任が4月当初この学級を受け持った時に遊びや会話において男女間の交流が少ないという問題意識をもち、意図的にクラス全員が交わって遊び学ぶ活動をいれていたことによる。実践者の問題意識に基づき、実践しながら、その場に働く力の変容の観点から協働省察し分析していくことをねらいとする。

性役割行動の発達や授業内容における性の取り扱い、教師の振る舞いの差に関しては、わが国でも研究が多くなされている。しかし、実際に教室のコミュニケーションの中で低学年時期にどのようにふるまいに相違がみられるかを心理学の視点から検討したものはない。Gilligan(1982), Gavriel & Smithson(1990)らは公的領域における女子の沈黙を指摘し、Gallas(1998)は低学年児童がパフォーマンスとしてジェンダーにより公的領域で異なるポーズをする方略をとること、女子の公的領域と私的領域でのふるまいのギャップを示している。そこで、教室における関係性をとらえる1視点として、ジェンダーをとりあげ検討する。

【方法】(4)(5)と同一学級。ただし本分析では4月から翌年3月までの「朝の会」計27回分を対象とする。(1学期10回、2学期11回、3学期6回)本学級は、男子23名、女子14名から成る。教師の配慮により、班構成時には必ず各班に2名以上の女子が含まれるような座席位置になっている。

【結果と考察】

1 沈黙の時期的変化 前回クラス内での語る子、応じる子、語られる子、黙る子の存在と分化を指摘した。沈黙者(1度も朝の会の公的発話において、日直

以外でその学期に1度も公的に語らなかった子どもの人数)の比率は、男子は1学期 2人(8%)、2学期 3人(13%)、3学期9人(39%)に対し、女子は3人(21%)、5人(36%)、11人(79%)である。増加傾向は両性共通だが、いずれにおいても、沈黙者の比率が女子の方が高いことが示された。

2 対話における役割と話題にする対象

1) 最初に話題提起する人数比は、1学期男 83% 女 79%、2学期 男 78% 女 64%、3学期 男 61% 女 21%である。また他者の発言への第1応答者になる者は、1学期 男 48% 女 14%、2学期 男 57% 女 36%、3学期 男 30%、女 7%である。1, 2学期では話題提供には大きな差はない。しかし、公的場面で相手の対話に対し、問いや反論批判などのつつこみをする役割を本学級女子では担う子が少ないことが明らかになった。

2) 男子では同性、異性をともに困ったことをした相手として、話題に挙げる。一方、女子は他の女子を挙げることはなく、男子のみを否定的話題の対象としてあげる。そこには、女子間での抑制が働いている。

3 女子におけるふるまいの個人差:A子とB子

本クラスで年間を通し特に発言の多い女子が2名いた。A子は話題提供者としての発言が多い子であり、肯定的内容の発言の中で同性の級友名をよく挙げる子である。これに対し、B子は話題提供者になるだけではなく、男子の会話の第一応答者となる。また男子から困ったことをした子として挙げられる唯一の女子であった。B子は4月から公的場私的場にかかわらず男子と活発に関わる子であった。しかしこのことが、他の女子との距離を生み出し、女子の中で浮いた存在となっていく。そこで教師は彼女が他の女子と休み時間に関われるよう教室環境を配慮した。またB子自身も教室外の文化を教室内に持ちこむ子としての役割を担いながら、2学期後半に女子の中に解け込んでいけるようになった。しかしこのことは一方で、B子自身が、公的場のみならず私的場でも、男子との対等のコミュニケーションを減らしていく傾向を生み出していった。

上記1-3の分析からは、ジェンダーがコミュニケーションを通して教室内の関係性と下位文化を形成していく一つの要因となっていることが示唆される。